

「民具名一覧」の見方・使い方 一凡例にかえて一

1. この報告書で提供する「民具名一覧」は、日本各地の博物館や民俗資料館に収集されてきた膨大な民具のコレクションを、たがいに結び付けることで、それぞれの地域に残された民具の意義を確かめ、全国的な視野から、比較検討ができる手がかりを提供することを目的で製作されたものである。志は高いものではあるが、未だ検討中の試案であることを了解いただきたい。

2. この一覧表は、次年度（平成26年度）に刊行を予定している「民具の名称に関する基礎的研究」の第2編「地域呼称一覧編」と併せて利用することで、有効に活用できるものとなることをめざしている。

3. 収集され保存されている民具は、地域の生活文化の特徴を明らかにし、その豊かな伝承を伝える手がかりとして重要な役割を果たすことが期待されているが、その存在意義を全国的な視点から表明することはなかなか難しい。なぜなら、それらが身近に当たり前存在したモノばかりだからだ。その価値を確かめるためには、全国的に比較してみることが必須の作業となる。

4. 民具は地域で用いられ、地域の名称（地方名・方言名）で呼ばれてきたもので、全国的に比較検討しようとしても、方言どうしをつなげることが容易ではない。そのために「同一」とみなされる民具に「標準名」を付けることが望まれてきたが、ほぼ日本全国で同じ名で呼ばれているモノでなければ共感を得にくい。全国ほぼ一律の名ならば、あえてそれを「標準名」と呼ぶ必要もない。むしろ、基本的な民具でも全国を東西に二分するような名称があったり、極めて多種類の方言で呼ばれている民具の場合は、特定の名前を選ぶと他の地域で違和感があり、広く市民権を得られる名前が定着するまでに時間がかかるだろう。そこで、あえて「標準名」を選ぶという方向性をとらずに、キーワードだと割り切って、同一種類とみなされる民具群にそれが判別できるような名称を示し、典型的な特徴を示す定義を与えておくことを提案する。いわばタグのようなものを付ける。一応それを「共通名」と呼んでおくことにする。

5. すぐれた民具コレクションは、保存状態のよい実物を豊富に集めている。その形態や仕組み、素材を目の前で実際に観察することが可能だ。そしてバックデータとして、その用途や使用方法や来歴とともに、それぞれの地域での呼び名が記録されていて、カードや台帳に記録されている。このよう

なすぐれたコレクションならばデータが明らかな資料から、同一の性格を持つ資料をつなぎ合わせることができる。そこで、今回のプロジェクトでは、全国8か所の民具のコレクションについて、同一資料をひとつの項目に並べる作業を試みた。そのときにチェック項目とする民具リストとして作成したのが、今回ここに示す一覧表である。

6. 従って、それぞれの分野の民具の種類を網羅しようとするリストではない。地域の博物館、あるいは専門分野のコレクションに実際に収集されている資料に即してとりあげ、積み上げていくことを目指していきたい。以上のような主旨から、この民具一覧表は、用途不明、名称も不明というような情報が欠落した収集品が何ものであるかを推測するような作業には、直ちに役に立つようなものにならないだろう。しかし、今後、すぐれた民具コレクションのデータを重ねていく中で、形態や素材から機能や用途、そして標準的な名称を探し出すことができる表に育っていく可能性が期待される。

7. 民具一覧表の分類は、日本全国の博物館、民俗資料館で多く採用されている文化庁の『民俗資料調査収集の手びき』（1965）の分類に準じ、ここでは生産・生業から始めて、およそどこにどのような資料が配置されているか想像しやすいことを優先した。なお、項目の選定にあたっては文化庁監修『日本民俗資料事典』（1970）・日本民具学会編『日本民具辞典』（1997）・岩井宏實監修・工藤員功編『絵引 民具の事典』（2008）を基礎資料とした。

8. 一覧表の分類は、大まかに用途による分類がされているだけで、その種類（下位分類）はすべての可能性を並べているわけではない。そのうちひとつの種類だけが、特徴的であればそれを項目に立てた。地域で実際に呼ばれてきた名称は、ある分野では用途や使い方でも下位分類をし、ある分野は形態や構造の違い、大きさ、作り方（編み方など）で分類するなどしているのが、ひとつの項目の下位に、基準の違う分類の項目名が並ぶと、ひとつの具体的物件をふたつの項目にあてはめられる場合も出てくる。しかし、この一覧表はいわゆる分類表ではなく、収集資料のうち共通する民具をそれぞれの項目にあてはめて、比較のために検索ができることを図る目的で作っていることを再確認しておきたい。

9. 全国版の民具一覧には、各分野（たとえば農耕用具）からできる限り多くの項目をとりあげるようにこころがけた。ただし、時間と紙面の制約から、項目数は限定的にならざる

を得なかった。そこで民具の全国的な比較検討を行う上で適当と考えられる民具を、分担者の責任で選択している。分野間で重複する項目を省略したり、特徴的な民具であっても、特定の地域だけに見出されているものなどは、とりあげなかった。これらは次年度刊行の「地域呼称一覧編」に譲ることにしたい。また、項目名としては、全国的に優勢な地域呼称があれば、それを優先的に採用し、複数の優勢な呼称が並列する場合などは、歴史的経緯や誤解を受けにくい名であることなどを勘案して「共通名」として提示し、並列する地域呼称などは解説内に記入するようにした。

10. ひとつの類型と考えられる民具が、地域ごとに多様な分類基準で呼ばれている場合には、既存の地域呼称の中から「共通名」を選ぶことは難しい。形態や構造、機能などから研究上の分類名（学術名いわばテクニカルターム）を設定することが相応しい場合がある。たとえば「背負梯子」とか「釜（うけ）」のように、これが民具の研究史上、比較的早くからとりあげられ、すでにこれが一般的に広く使われるようになっていけば、これに従うことが適当な場合もある。しかし、調査研究の進展に伴って、伝承状況の理解が深まり、類型の捉え方が変わってくれば、「共通名」としては修正を加えて行く必要があるだろう。また、学術的には有効でも、イメージがつかみにくい命名がなされている場合に、たとえ博物館の世界だけでも広く普及することが難しいと考えられる名称がある（たとえば下駄の種類に「連歯下駄」という分類名の設定がなされた例など）。このような場合は、上位項目にとどめたり、地域呼称のひとつを代表させたりして、学術名（たとえば「釜」の分類名の「横釜」「縦釜」など）は、項目名とはせずに、解説内の紹介にとどめている。

11. 今回、民具名一覧にとりあげられた民具は、民具の諸分野のうちから、農耕や漁撈などの生業に関わるものと、衣食住に関わるものに限られている。ただ、これらの中でも諸職と言われるさまざまな職人の用具類などは、わずかな分野にとどまっている。木工関係の職人の用具などは共通するものが多いが、特異な分野は未着手のままとなった。

また、社会生活、人の一生、年中行事、信仰、芸能、遊びといった分野の民具の検討もできていない。これらの分野には、制度や儀礼などの無形の民俗で用いられてきた象徴的機能を持つ多彩な民具が存在する。民具研究ならではの魅力的な分野であるが、膨大な検討対象が想定されるため、改めて検討の機会が設定できることを期待したい。

12. 次に「一覧」の項目ごとの記述方法について紹介する。検討対象の民具を一覧表形式で提示するため、紙面の制約から、欄を増やさずにひとつの項目に下位の概念が想定さ

れる場合には「上位項目」であることを、名称を太字にし、かつ欄に「網かけ」をすることで示した。

13. 「説明」欄には、項目にとりあげた民具の「定義」をできるだけ試みるようにした。民具の形態的特徴や機能を述べ、すでにその道具を知らない若い世代や外国人にも理解できるように記述をこころがけた。これも担当者の責任で書き込んでいるが、「定義」はあくまで典型的なものを示すことを目指して、「必要十分」な条件を示したものではないことを重ねて記しておきたい。隣接する項目（類型）との境界は必ずしも明確ではないのが実際のあり方である。

14. 「民具アイコン」は、検索性を高めるために見出しとして図示をしている。これも「定義」と同様に、その項目のイメージを典型的に示す民具を選ぶことをこころがけたが、図の持つ力が大きいだけ、どのような図を描くのが適切かは、難しい課題であった。これも今後の課題として、ひとつの提案だと受け止めていただきたい。

15. 民具名の各項目の右側には、第2編「地域呼称一覧編」で、主に8つの地方の方言名の欄を設けて表示する予定であるが、今回の報告書の一覧表には、その欄はまだ示されていない。その代わりに「さまざまな呼称」欄を設け、方言辞典の類に収録されている方言名を列挙した。ただこの情報は、予備的に行ったもので、方言辞典の類の簡単な解説だけを手がかりにしており、項目として示した民具と「同一のもの」を示すかどうかの確証は無い。あくまで現時点で可能性があるモノを列挙したものである。主に参考資料は次の通り。その他の文献とプロジェクトの委員が示した情報を注記した。

東條操編『全国方言辞典』東京堂出版 1951年

東條操編『標準語引 分類方言辞典』東京堂出版 1972年

佐藤亮一監修『標準語引き 日本方言辞典』小学館 2004年

16. 今回、提示できた項目数は、約1,092項目に及んだが、民具の多様性からいえば限られたものになった。その理由は、基本的には「制限時間」切れ。「衣・食・住」に関わる生活の用具と「農耕・漁撈」などの生産の用具までで終わり、準備をしていた「社会生活」や「年中行事」「人生儀礼」の用具などの項目には及ばなかった。ただ、あらゆる道具類に象徴的な意味が付加され得ると考えると、儀礼関連の用具は、これまで検討を加えた「仕事の道具」のほとんどすべてに重なり、その規模は極めて大きなものになると考えられた。魅力的なテーマだけに別のプロジェクトを立ち上げなくては手に負えないと考え、今回は割愛せざるを得なかった。

(神野善治)